

# 中国史史料研究会会報

準備号



## 創刊のご挨拶

志学社の平林緑萌さんや山田崇仁さんと中国史の新しい研究会、中国史史料研究会を立ち上げようということになり、昨夏以来話し合いを続けてきた。従来の研究会・学会よりも一般の歴史ファンに間口を広げた会にしようということで、論考を掲載する会誌とは別に会報を発行することにし、発行回数も年6回とかなり多めに設定した。他の研究会・学会でも会誌とは別に会報を発行している所があるが、発行回数は年1回程度である。どこの会報も似たり寄ったりだろうと思っていくつか手に取ってみると、コーナーをきっちり定め、文字通り会報、会の活動報告に徹しているものもあれば、毎回コーナーに異同があるものもありと、千差万別である。会報にもその会のカラーがよく現れている。本会の場合は今のところ会員の活動報告、研究札記、そして歴史ファンを意識した中国史関連書籍やエンタメの紹介という構成になっている。これが研究会の始動とともにどう変わっていくか。読者の皆様に見守って頂くとともにご支援頂ければ幸いである。

中国史史料研究会会長 佐藤信弥

# 中国史史料研究会会報

## 準備号 目次

---

- 02 創刊のご挨拶 (佐藤信弥)
- 06 [回想録] 亀田俊和の台湾通信 第1回  
(亀田俊和)
- 18 [学会報告] 第29届 中国文字学国際  
学術研討会参加報告 (佐藤信弥)
- 33 [紀行] 興城古城 (寧遠城址) 紀行  
(綿貫哲郎)
- 49 [学術札記] 前漢功臣伝抄 はじめに  
(平林緑萌)

57 [書籍紹介] 岡本隆司『近代日本の中国観  
石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』  
(池田修太郎)

66 [エンタメ] 中国時代劇の世界 第1回  
『昭王～大秦帝国の夜明け～』  
(佐藤信弥)

76 研究会案内

78 執筆者紹介・編集後記

81 2019 年度 中国史史料研究会役員構成

82 奥付





〔台湾大学正門の門衛所〕  
戦前の台北帝国大学時代から存在するが、公募書類を出した時点ではまったく知らなかった。

## 亀田俊和の台湾通信

### 第 1 回

としか  
亀田俊和

毎年 11 月 3 日の文化の日、京都大学文学部日本史学研究室で「読史会大会」と呼ばれるイベントが開催される。これは同研究室の同窓会的組織である読史会の行事で、若手の大学院生から大家の名誉教授に至る数名が研究報告を行った後、懇親会を開いて旧交を温めるものである。

私は 2016 年の読史会にも参加し、1 次会の懇親会が終了した後、2 次会までの合間に歓談していた。そのとき古代史の吉川真司先生に、半ば唐突に「君たち、台湾に住んでみる気はあらへんか？」と尋ねられた。

「え、台湾、ですか??？」

「実はな、台湾大学という大学で公募が出ているんや。その気があるんなら、後日募集要項をメールで送るけど、

どうや？」

1次会でビールやワインを飲み、すでにほろ酔い気分になっていた私は、正直に言えばそのとき吉川先生のお誘いをあまり本気で受け取っていなかった。ほんの軽い気持ちで承知したことを覚えている。

当時の私の肩書きは、京都大学文学部非常勤講師であった。しかし担当授業は複数の講師によるリレー形式で、実際に授業を行うのは年に1回だけであった。この本業の年収は約8千円。もちろん、これで生活できるわけがない。

幸い 2014 年頃から継続的に著書執筆の御依頼をいただくようになり、数冊の刊行が続いていた。自身の研究成果を広く社会に公開し、改めて勉強



にもなる。そして少しでも経済状況をよくしたいという思いももちろんあった。しかし、現実には貯金はさほど増えなかった。いただいた印税や原稿料は次の著書執筆のための取材旅行費に消え、貯金額を維持するのが精一杯であった。

その他、東進ハイスクールで模試の問題と解説を作成するアルバイトも行っていた。これは、現立教大学文学部准教授の佐藤雄基氏にご紹介いただいた仕事である。メールや校正原稿のやりとりだけであったが、これほど気持ちよく働かせていただいた仕事はなかった。最初はセンター試験の問題を担当したが、やがて京大入試をまかされるようになり、毎回個性的な問題を工夫して考えるのもおもしろかった。

しかし、これも年2回だけで、自活できるほどの報酬はもちろんいただけない。

結局、メインの収入は京都大学医学部付属病院駐車場の整理誘導員であった。同僚はさまざまな人生を送ってこられ、人柄の優れた方が多く、心温まる職場であった。清掃・警備など、他の部署の方々とも仲よくさせていただいた。来院した患者さんやお見舞いの方や業者さんに「いつもおつかれさま」とねぎらっていただくこともあり、そういうときは本当にうれしかった。

だが、ここにはとても書けないようなつらくて嫌な思い出もたくさんある。夏の暑さと冬の寒さも過酷であった。私が駐車場で働いていることを嘲笑<sup>ちょうしょう</sup>している人々がいるという噂も聞こえて

きた。職業で人を見下し、差別する人間は最低である。しかし、力で蔑んでくる人間には、力で返して黙らせるしかない。じっと耐えるしかなかった。

そして、この駐車場の仕事も経済的には非常に厳しいものがあった。本業も続けながらなので休むことも多く、収入は月 10 万円弱のことが多かった。1 度、最大で 17 万円もらったことがあるが、この月は文字どおり朝から晩まで毎日働いていた。

結局、自分で働いて得た収入は原則として貯金し、生活面はまことに恥ずかしながら、いい年になっても実家からの仕送りに頼らざるを得なかった。自活できていたのは、日本学術振興会特別研究員だった 2007 ～ 09 年度のわずか 3 年間だけである。私を自信過剰

と誤解している方もいるらしいが、こんな状況では人並みの自信さえ持てるわけがない。ただの穀潰し<sup>ごくつぶ</sup>にすぎなかった過去も永遠に消えない。完全な誤解である。

台湾大学のお話が来たときの状況は、おおよそこんな感じであった。それまで、50以上の大学や博物館に応募していた。博物館のために、公務員試験の問題集を買って勉強したこともある。しかし、すべて落ちていた。

特に大学は面接や模擬授業の段階にも進めず、すべて書類審査で<sup>は</sup>刎ねられていた。当時の私は、応募する前から不採用と決めてかかっていた。変に期待すると、かえって精神的なダメージが大きい。日本史研究者が、日本国内の大学でさえ箸にも棒にもかからない。

まして今回は海外の大学である。またいつものように、「どうせ不採用だろうが応募しないよりはまし」という気分であった。

読史会大会の数日後、吉川先生から台湾大学の募集要項をいただいた。しかし、すぐには書類の作成に取りかからなかった。当時、『征夷大將軍・護良親王』(戎光祥出版、2017年)の校正作業に忙殺されていたように記憶している。群馬県ひこべの名家彦部家と立教大学での講演も依頼されており、それらの準備にも追われていた。そもそも、本当に応募しようかずっと迷っていたというのもある。

結局応募を決意し、ようやく書類の作成を始めたが、台湾大学に限らず、大学の公募書類というのは作成が大変

で、心労の重なる作業である。まずはもちろん履歴書から取りかかったが、中国語か英語で作成するようにとの募集要項の指示を見て、早速心が折れかけた。

申し遅れたが、私は中国語をまったく知らなかった。大学の学部で選択した第二外国語はドイツ語であった。当時知っていた中国語は、「你好」「謝謝」「再見」程度である。四声については、中国語を履修していた人から教えてもらって知っていた。後は「我愛你」「你愛我」と冗談で言い合っていたくらいである。中国語で履歴書など書けるわけがない。そしてもちろん、これも応募を逡巡<sup>しゅんじゅん</sup>していた大きな理由であった。

困った私は、中世史の上島享先生に相談した。すると、すぐに中国人の留

学生に依頼して、履歴書を中国語に翻訳していただいたものをご送付いただいた。この間、わずか30分程度だったように記憶している。2～3日はかかると思っていたら、予想外に早く戻ってきたので非常に驚いたが、ここまでしていただいて応募しないわけにはいかない。私は腹を括<sup>くく</sup>って覚悟を決めた。

その後も公募書類の作成は大変であったが、何とか完成させ、台湾に郵送したのは年末年始の提出期限ギリギリであった。そのときも、期限に遅れて落とされても別にいいやくらいの気分だった。

駐車場で管理責任者の方に、「台湾大学に応募しましたよ。まあ、今回もどうせ落ちるんですけど」と言ったら、「いや、今回は何だか絶対に通る気が

します」と言われた。

この人こそ、非常に優秀なのになぜここで働いているのかまったくわからない方であった。私が駐車場で働き始めた後に入ってこられたが、過去はまったく知らない。しかし、アカデミズムの世界とはまったく無縁な人生を送ってこられたであろうことは確かである。学歴も存じないが、少なくとも大学院には行かれていないはずである。

いくら優秀でも、学界をご存じない方がなぜここまで確信されるのか、私にはまったく理解できなかった。だが、その“予言”がまさか的中するとは……。





# 第 29 届 中国文字学国際学術 研討会参加報告

佐藤信弥

## ○学会の概要

台湾の中国文字学会（中国にも同名の学会が存在する）は、年 1 回国際学術研討会（国際学会）が台湾各地の大学の持ち回りで開催され、文字学（日本語では「漢字学」と訳すべきだろうか）の研究者が「『説文』<sup>せつもん</sup>学及び相関論題」「<sup>じょう</sup>字樣学と俗文字学」「古文字学及び相関論題」「文字学史と歴代字書研究」「漢字教学と資訊相関論題」「その他」の六つの分野に分かれて研究発表を行うほか、研習会（講習会）の開催なども行っている。現在の学会理事長（会長）は東海大学中

文系（中国文学科）教授の朱岐祥<sup>しゅきしょう</sup>氏、秘書長（幹事）<sup>ほうこう</sup>は逢甲大学中文系助理教授（助理教授は講師と副教授＝准教授との間に位置する職位）の余風<sup>よふう</sup>氏である。朱岐祥氏は台湾の著名な甲骨学者である。

## ○エントリー

筆者がこの学会の存在を知り、エントリーするきっかけとなったのは、2017年9月に中国の三峡大学で開催された世界漢字学会第5届<sup>かい</sup>年会（届は回・次の意）にて朱岐祥氏の勧誘を受けたからである。同氏は国際学会に出席するたびに外国人研究者にエントリーを促しているようである。筆者は同学会より帰国後、学会ホームページより「金文中有関軍功的<sup>り</sup>釐字」（金文中の軍功に関する釐字）のテーマで提要（サマリー）を

提出し、提要と論文本文の審査を経て第 29 届中国文字学国際學術研討会での発表が認められた。

## ○会場の概要

会場となった国立中央大学は台北市<sup>たいぺい</sup>からほど近い桃園市内<sup>とうえん</sup>に位置する。桃園国際空港も同市内にある。名称は民国期<sup>なんきん</sup>に南京で開設された国立中央大学を承<sup>う</sup>けたもので、中国でのその後身<sup>こうしん</sup>にあたる東南大学や南京大学などとの交流もあるようである。

## ○スケジュール

海外からの参加者については学会開催の前日の 5 月 17 日（木）に受付をするよう通知があった。そして 18 日（金）の午前中から 19 日（土）の午前中にか

けてが学会となり、19日の午後は日帰りでエクスカージョン、そして20日(日)までに各自解散というスケジュールである。筆者は20日の解散後に高速鉄道で桃園駅から台北へと移動し、故宮博物院の見学と台北市内の書店巡りをし(もっとも日曜日ということで閉店している店も多く、はかばかしい成果はなかった)、21日(月)に帰国した。

## ○宿舎・食事

17日の午後に関西国際空港より桃園国際空港に到着すると、中央大学中文系の大学院生と思しき学会の案内係が出迎えに来ており、彼女たちの差配でタクシーに案内され、外国人参加者の宿舎となる会場内の中大会館へと移動。17日の夕方より桃園市内のレスト



正門付近にある「中央大學」の  
校名に形を整えられた芝生

ランに移動し、開催校である中央大学  
中文系及び学会関係者、そして他の海  
外からの参加者とともに晩宴に参加し、  
顔合わせとなった。

食事は、基本的に朝食は学内の  
ファーストフード店で各自済ませ、昼  
食は熱々の弁当を支給（肉食とベジタリア  
ン用の菜食との二種類が提供されていた）、夕  
食はレストランなどに移動しての晩宴  
となる。18日の晩宴では中央大学中文  
系の男子院生が舞台上がって崑曲（中

国南方の地方劇)の歌を披露するという一幕もあった。

## ○発表の形式

他の国際学会と同様、発表報告の前に開催校中央大学の校長(学長)や文学院(文学部)学部長等の挨拶や記念写真撮影があったが、校長挨拶では、文字・漢字に関する学会ということで、開催の少し前におこった北京大学の創立120周年記念式典の挨拶で校長が漢字の読み間違いをしたというニュースが取り上げられた。

発表報告は中央大学文学院内の2つの会場に分かれ、司会者による紹介3分、発表報告10分、コメンテーターによるコメント7分、そして各組の発表が終了した後に発表者が1人2分でコ

メントに応答するという流れで進行した。発表者は計 42 名で、甲骨・金文など古文字に関するものや『説文解字』に関する発表が多かった。プログラムと発表報告論文については学会のホームページの第 29 届のページを参照。

(<http://charactercl.blogspot.com/2018/05/29.html>)

筆者は 18 日午前中に「金文中有関軍功的釐字」を発表。司会は台湾大学中文系教授の徐富昌氏<sup>じょふしょう</sup>で、コメントは当日参加できなかった中山大学中文系教授で西周金文の研究者として知られる何樹環氏<sup>かじゅかん</sup>のコメントペーパーを徐氏が代読した。コメンテーターも PDF あるいは PowerPoint を使用してコメントする人が多く、発表の内容に関するもののほか、誤字脱字や表記の不統一





文学院中庭の大樹



崑曲博物館の入口

などの類も細かく指摘される。筆者も人名の誤表記や中国語の文法の誤りに関する指摘を受けた。

18日の最初に朱歧祥氏による全体講演「<sup>いんきよかえんそう</sup>殷墟花園莊東地甲骨文選釈」が行われ、18日の最後にミニシンポジウムが「説文学の漢字教学における意義」のテーマで行われた。また、会場の中央大学文学院では崑曲の研究を進めて

いるようで、文学院内には崑曲博物館が設置されており、本来土日は閉館のところ、見学希望者が多いということで特別に18日の昼休みにガイドによる案内付きで開館された。崑曲の上演に使用される衣装や装飾品などが展示されていた。

## ○参加者・外国人

今回の日本からの参加者は筆者のほか、京都大学人文科学研究所特別研究員の李媛<sup>りえん</sup>氏、南山大学教授の梁<sup>りょうぎょうこう</sup>曉虹氏（甲骨学者として著名な高嶋謙一氏の夫人ということである）の計3名で、毎回日本から2、3名程度の参加者がいるようである。そのほかは中国・韓国・シンガポールからの参加者がいた。中国からの参加者2人連れは19日早朝に宿舎の前

にタクシーを止めていたので早々に帰国するのかと思いきや、19日午前中の学会には参加せず台北故宮を見に行くということであった（午後のエクスカーシヨンの時には戻ってきていた）。筆者も含めて海外からの参加者は学会終了後すぐに帰国せずに台北故宮まで足を運ぶという人が何名かいたが、中国の研究者の場合はビザなどの関係でそういう自由があまりきかないのかもしれない。

## ○エクスカーシヨン

19日の昼食後はエクスカーシヨンとして、桃園市内の観光地であるだいけいろうがい大溪老街への日帰りバスツアーが行われた。海外の国際学会では、人文系の分野でも日帰りあるいは一泊二日でこうしたツアーが催されることが多い。



大溪老街 の大通り



大溪老街の裏路地

大溪老街は日本統治時代の街並みや建築が保存されている区域で、大通りのほか、庶民が暮らす裏路地も見学した。台湾の有名歌手で 2012 年に亡くなったフォンフェイフェイ鳳飛飛の出身地ということで、彼女の生家の郵便受けにはブロマイドが貼られていた（ただ、筆者は彼女の歌は「追夢人」しか知らない）。

## ○予稿集

会議論文集（中華圏では学会予稿集に相当する冊子をこのように呼称する）は、少なくとも 2015 年開催の第 26 届までは市販されていたようであるが、第 27 届以後は学会ホームページ (<http://charactercl.blogspot.com/>) で一部を除いて論文の PDF が閲覧・ダウンロードできるようになっている。筆者が参

加した第29届の場合は、紙の論文集は参加者に配布・販売されるのみであった。ただ、論文集にはISBNが付けられており、学会ホームページには論文単体のほか論文集全体のPDFも提供されていて、ネットに上げられているものが正式の論文である旨表明されている。学会開催の少し前にメールにて論文を論文集やホームページに掲載してよいかという問い合わせがあった。ここで拒否の返答をすると、参加者に論文のコピーが配布されるのみとなり、他の雑誌等への投稿・掲載が可能となるということのようである。何にせよ発表者の立場からすれば予稿集掲載論文を雑誌掲載論文に相当するものとして学会側が認めているというのはありがたい。

## ○次回学会について

次回第 30 届は 2019 年 5 月 24 ～ 25 日に<sup>たいなん</sup>台南の国立成功大学にて開催予定とのことである。既にエントリーは締め切られているが、毎年 9 月頃から翌年開催分の告知が出る。文字学は単に個別の文字や語句の解釈にとどまらない自由な分野である。「自分の専攻は歴史学だから関係ない」などと思い込まず、エントリーを検討してみて欲しい。





# 興城古城（寧遠城址）紀行

綿貫哲郎

## 〇はじめに

北京より東北へ約 550 km、万里の  
長城最東端の山海関さんかいかんから錦州きんしゅうを結ぶ  
遼西回廊りょうせいかいろうの中間地点、遼寧省興城市りょうねいしょうこうじょう  
に寧遠城址ねいえんじょうしがある。

明宣徳三年せんとく (1428)、遼東都指揮使司りょうとうとし き し し (明  
初の遼東地域に設置された軍政機関) の下に  
寧遠衛ねいえんえいが置かれ衛城が築かれた。天啓  
三年えんすうかん (1623) に袁崇煥が修築し、紅夷砲こういほう (ポ  
ルトガル製の最新式大砲) 十数門を備え付  
けたが、これは西上する後金こうきん (後の清朝しんちょう)  
軍を阻むためであった。同六年 (1626)、  
袁崇煥は寧遠城を包囲した後金軍のヌ  
ルハチしんたいそ (清太祖) を撃退 (ヌルハチにとって

生涯唯一の敗戦であり、敗戦後間もなく死去した)、翌七年(1627)にはヌルハチの後を継いで攻め寄せたホンタイジ(清太宗)を再度退けている。

明代四大古城のひとつに数えられる寧遠城址は、現在では興城古城こうじょうこじょうと呼ばれ中国国内から多くの観光客が訪れている。清朝史・八旗制度研究を専門とする筆者は、近年は興城出身の祖大寿そだいじゅという人物を主な研究対象としている関係で、2010年以降に五度興城を訪れている。一日で見学可能な興城古城の見所について、明清交替期の部分を中心に紹介したい。

## ○アクセス

興城古城へのアクセスは、北京ペキン駅から興城駅まで快速列車で五時間から八

時間、<sup>しんよう</sup>瀋陽駅または瀋陽北駅から四時間弱から五時間程で到着する。巨大な袁崇煥石像が立つ興城駅前広場より興城古城西門まで、徒歩で五分程である。

一方、高速鉄道を利用する場合は、戦後の日本人引揚者送還で知られる「コロ島」こと<sup>ころとう</sup>葫芦島北駅が最寄り駅となる。北京駅から三時間半、瀋陽駅または瀋陽北駅から一時間半程で到着するが、葫芦島北駅から興城市街まで直通バスはないので、駅前に溜まるタクシーを使うとよい。興城古城（南門または東門）まで約四十分、値段は70 元くらいである。

○フリーチケット「<sup>トンピャオ</sup>通票」を買おう

「通票」とは「パス」または「一日フリーチケット」をいう。有料見学場所

では、基本はチケットをその都度購入するが、興城古城では「通票」一枚で  
じょうへき 城壁・しょうこうろう 鐘鼓楼・けいりょうとくしふ 薊遼督師府・ぶんびょう 文廟・しゅうたく 將軍府（ちやうがくりやう 張學良の部下、こうじょれん 郜汝廉の邸宅）・しゅうたく 周宅  
（民国初期の富豪の邸宅）の六ヶ所（実際は  
じょうこうびやう 城隍廟を含めた七ヶ所）に入館できる。

2015 年時点では 100 元だったが、入口の無人化（QR コード読み込みによる自動化）で、2018 年 11 月時点で 70 元に値下がりしていた。

## ○城壁（こじょうしょう 古城牆）と鐘鼓楼

城壁は興城古城（以下「古城」と略称）の主な見所であるが、乾隆四十四年（1781）に修築されている。城壁は南北 822.5m・東西 803.7m の正方形に近い形で、高さ 10m・土台の広さ 6～7m・上の広さ 4.5m である。城門は東西南



興城古城の延輝門（南門）  
手前は切り取られた甕城

北の四面に、<sup>しゅんわ</sup>春和門（東）・<sup>えいねい</sup>永寧門（西）・  
<sup>えんき</sup>延輝門（南）・<sup>いえん</sup>威遠門（北）が置かれ、こ  
れらを結ぶ十字の道が古城内の大通り  
となっている。また全ての門に城門楼  
と半円形の<sup>おうじょう</sup>甕城（現在は正面部分を切り崩し  
て道路としているが、旧来の入口は 90 度曲がっ  
た場所にあった。<sup>いしだたみ</sup>足下の石畳で確認できる）を  
備える。紅夷砲や明代兵士の人形が並  
べられ、<sup>えん</sup>袁の一字を描いた鮮やかな旗

がたなびく城壁・城門楼を外から眺めるのは無料だが、登るのは有料である。城壁の上からは、古城の城内や各城門、激戦地となった<sup>しゅざん</sup>首山が見渡せるほか、そのまま上を歩いて一周することも可能である（2018年11月時点で、登り降りできるのは南門と東門の2ヶ所のみ）。

鐘鼓楼は古城の中心に位置する。三層の楼閣は高さ17m、現在は陳列館となっているが特に参考となる歴史資料はない。ちなみに、鐘鼓楼から東西南北の各門までは、ちょうど一里（約400m）である。

## ○<sup>そだいじゅせきぼう</sup>祖大寿石坊・<sup>そだいらく</sup>祖大楽石坊

古城の南門（延輝門）と鐘鼓楼とを結ぶ道が<sup>えんきがい</sup>延輝街である。<sup>りょうねいでんしだい</sup>遼寧電視台の歴史ドラマ『袁崇煥』（1986年）を南門一



祖大寿石坊  
奥は祖大楽石坊、さらに奥は鐘鼓楼

帯で撮影したこともあり、延輝街の両側は明清時代の建物が復元されている（現在は土産<sup>みやげ</sup>土産屋などが立ち並ぶ）。

この延輝街で異彩を放つのが、興城出身で軍閥<sup>ぐんぱつ</sup>（「祖家将」<sup>そかしょう</sup>）を率いた祖大寿（南側）と従弟祖大楽（北側）<sup>せきぼう</sup>の石坊（牌楼<sup>ばいろう</sup>・牌坊<sup>はいぼう</sup>とも称される）である。祖大寿の石坊は、崇禎四年<sup>すうてい</sup>（1631）に明朝皇帝から曾祖父以来、四代にわたる忠誠を

讃えられたもので、高さ 11m、<sup>かこうせき</sup>花崗石  
で作られている。祖大楽石坊は、同じ  
く明朝皇帝より崇禎十一年(1638)に賜つ  
たもので、高さ 14m、赤色花崗石で作  
られている。

## ○<sup>けいりょうとくしふ</sup>薊遼督師府

鐘鼓楼の東側にある。明末の北方を  
統括する最高軍政機関であり、天啓二  
年(1622)に内閣大学士<sup>そんしょうそう へいぶ</sup>孫承宗を兵部  
<sup>しょうしよ うとぎよしとくしけいりょう</sup>尚書・右都御史督師薊遼に任じ、薊遼  
督師府を寧遠城に置いたことに始まる。  
2015 年に訪れたときに開放していた。

<sup>ふもん</sup>府門の内部は、<sup>かんが</sup>官衙としての<sup>だいどう</sup>大堂・  
<sup>こうどう ふくしょうしよ かんぐんしよ りしや かんごく</sup>後堂・副将署・監軍署・吏舎・監獄が  
復元されているほか、寧遠城や明代遼  
東を知るための遼東英烈展(遼東で陣没  
した明朝高級武官の展示)・薊遼督師府史料





薊遼督師府

展（薊遼督師府の歴史展示）・袁崇煥紀念堂

カントンとうかん こうせいとうけん ふっけんしょうぶ  
（広東東莞・広西藤県・福建邵武・遼寧興城・北

京での袁崇煥に関する展示）・明清遼東戦史

館（清朝開国説話より北京遷都までの展示）・

明清官服・明清兵器など充実した内容

のものであり、興城や遼西地域（遼東の  
りょうせい  
西側）に深く関わる人物を中心に、彼ら  
の果たした歴史的な役割を確認できる  
展示である。



碑林（興城文廟内）

こうじょうぶんびょう  
○興城文廟

古城の南西部に位置する。明宣徳五年（1430）に創建された、中国東北部で最古の文廟である。文廟とは孔子の霊を祀る建物を指すが、碑林や博物館施設が併設されている文廟は少なくない。また名宦祠・郷賢祠には、現地の民に慕われた人物が祀られている。

興城文廟の名宦祠には明代から民国

までの遼西出身者 15 名、郷賢祠には同じく 18 名が祀られており、文献資料で見落としがちな人物が多々いる。以前は位牌と略歴のみの展示であったが、2017 年以降は小さな胸像が加わった。

碑林には明代中期以降の遼西地域の石碑が集められている。寺廟の建立や再建の碑文からは、文献資料とは異なる現地の人物同士の繋がりを知ることができる。このような石碑の多くは、以前は邸宅の敷石に使われていたものが多く、切断の跡が痛々しい。

そだいじゅ ぼ ひ  
○祖大寿墓碑（興城文廟内）

碑林の西壁側に説明板のない野積みされた石塊がある。祖大寿の墓は、興城そかふん西河近くの祖家墳にあったが、1974



祖大寿墓碑の石塊（興城文廟内）

年に平地にするため、火薬で爆破され埋められた。2011年に掘り出され、石塊8個が文廟碑林に運ばれた。筆者が2013年に二度目に訪れた時は、碑林の前に無造作に積まれていた。

『(民国) 興城県志』の「鎮国將軍祖大寿墓碑文」には、「惟順治十三年八月十五日，皇帝遣永平府知府羅廷嶼，諭祭故精奇尼哈番品級祖大寿之靈。曰：

ジンキニ=ハファン

惟爾持身敬慎，秉性成老，方且蒙優。  
忽焉告殞，爰頒祭葬，用表哀悼，永奠  
佳城，靈其來享。歲次己亥三月吉旦立」  
とあり、文字が記された3つの石塊に  
は「順治十三年八月十五……皇帝遣永  
平府知府羅廷……諭祭故精奇尼哈番品  
……慎，秉性（「……」は欠損部分）」・「老，  
方且……佳城，靈……三月」・「級祖大  
寿……優。忽焉告殞……享……吉旦」  
とある。紛れもなく祖大寿本人の墓碑  
である。近年、カナダトロントのロイ  
ヤル＝オンタリオ博物館には、民国期  
に北京市海淀区永泰莊より運ばれた祖  
大寿の墓と称されるものが展示されて  
いるが、祖大寿本人の墓は北京にはな  
く故郷の興城にある。カナダにある墓  
は、祖大寿の子または一族のものであ  
ろう。

ねいえんえきかん  
○寧遠駅館

鐘鼓楼の西側にある。明宣徳年間<sup>せんとか</sup>（1430 年代）に建てられ、文書の伝達や官員の往来の中心であった。清代には東巡<sup>とうじゅん</sup>した 4 名の皇帝が滞在した場所でもあり、清朝皇帝のレリーフがある。2017 年に訪問した際に、明清時代の建物が復元され対外開放されていた。しかし、まだ多くが空き家であり、今後次々と文化施設や商店が入ることで、古城の観光の一翼を担う施設になると思われる。

○おわりに

興城古城は、世界遺産に登録された平遥<sup>へいよう</sup>（<sup>さんせいしょう</sup>山西省）、中国歴代王朝の都が置かれた西安<sup>せいあん</sup>（<sup>せんせいしょう</sup>陝西省）、熱狂的な三国志ファンを擁する荊州<sup>けいしゅう</sup>（<sup>こほくしょう</sup>湖北省）という他

の3つの明代古城に比べると、知名度や交通アクセスが今ひとつである。

しかしながら、「一座寧遠古城，半部明清戦史」と称され、万暦<sup>ばんれき</sup>四十六年(1618)から崇禎<sup>すうてい</sup>十七年(1644)におよぶ明清戦争と深く関わった城であることは事実である。袁崇煥はヌルハチからこの城を守り、興城出身の祖大寿と彼が率いた軍閥<sup>ぐんぱつ</sup>の活躍はホンタイジを悩ませ続けた。その歴史的役割は他の明代古城に決して劣るものではないのである。





# 前漢功臣伝抄 はじめに

も え ぎ  
平林緑萌

前漢武帝期の終わり頃におおよその  
編纂を終えたと考えられている『史記』  
は、漢建国の功臣たちについて、世家、  
列伝、表などで顕彰する。

しかし、記述の総体的な多寡<sup>た か</sup>や史料  
的性質にかかわらず（ここでは詳述しない  
が、『史記』はさまざまな材料を寄せ集めて編  
纂されている）、よく知られるのは張良、  
陳平<sup>ちんぺい</sup>、蕭何<sup>しょうか</sup>、樊噲<sup>はんかい</sup>、韓信<sup>かんしん</sup>といった、一  
般に通行する「面白い」エピソード  
——「鴻門<sup>こうもん</sup>の会<sup>かい</sup>」のように、その多く  
は説話的記述である——を持つ人々で  
ある。

たとえば、劉邦<sup>りゅうほう</sup>の古馴染<sup>ふるなじ</sup>みでもある

夏侯嬰は、彭城の戦で敗れ、敗走中に馬車から投げ捨てられた劉邦の子女（のちの恵帝と魯元公主）を拾いあげたエピソードで知られているが、彼の列伝を見てみると、戦車部隊長として果敢に戦場に在ったことも記述されている。

夏侯嬰の列伝もまた、さまざまな来歴を持つ史料を組み合わせて編纂されたものと思いが、『史記』の他の箇所には見えない「以兵車趣攻戦疾（いま仮に「兵車を以て趣かに攻め戦うこと疾し」と訓じる）」という定型表現が四度登場することが注目される。

この定型表現とともに必ず軍功を記し、「賜爵○○」と賜爵について述べられることから、当該部分の原史料は一種の「軍功記録」とでもいうべきものであったと考えうるだろう。

從擊秦軍碭東、攻濟陽、下戶牖、  
破李由軍雍丘下。以兵車趣攻戰疾、  
賜爵執帛。

常以太僕奉車從擊章邯軍東阿・  
濮陽下。以兵車趣攻戰疾、破之、  
賜爵執珪。

因復常奉車從擊秦軍雒陽東。以  
兵車趣攻戰疾、賜爵封轉為滕公。

因復奉車從攻南陽、戰於藍田・  
芷陽。以兵車趣攻戰疾、至霸上。  
……漢王賜嬰爵列侯、號昭平侯、  
復爲太僕。

夏侯嬰側が保存したものを『史記』

が閲覧したのか、公式記録を『史記』が採用したのかという問題は残るが、恐らく前者であろう。これは、決起前に劉邦と語り明かしたり、馬車を止めて子供たちを拾いあげたのとは異なる夏侯嬰像を提供する史料と評価できる。

夏侯嬰と同様の傾向は、樊噲列伝においてさらに顕著に見いだせるが、ここでは列伝編纂にあたり、劉邦という権力が発給した「文書」の一部が採用されていることを指摘するに止めよう（日本中世史の研究成果を紹介しつつ、いずれ詳述する予定である）。

さて、列伝に比べればひとり当たりの文章量でははるかに劣るものの、表も重要な史料となる。試みに『史記』高祖功臣侯者年表（以下、功臣表）の功

第を記せば、十位までが、

蕭何、<sup>そうさん</sup>曹參、<sup>ちようごう</sup>張敖、<sup>しゅうぼつ</sup>周勃、樊噲、  
<sup>れきしょう</sup>酈商、<sup>けいけん</sup>奚涓、<sup>かんえい</sup>夏侯嬰、<sup>ふかん</sup>灌嬰、傅寛、

となっており、以下、

<sup>きんきゅう</sup>靳歙、<sup>おうりよう</sup>王陵、<sup>ちんぶ</sup>陳武、<sup>おうきゅう</sup>王吸、<sup>せつおう</sup>薛歐、  
<sup>しゅうしょう</sup>周昌、<sup>ていふく</sup>丁復、<sup>こほう</sup>蠱逢……

と続く。冒頭に挙げた面々に加えて、  
<sup>ちようじ</sup>張耳の子である張敖、<sup>りよし</sup>呂氏打倒で活躍  
する周勃を除けば、功第上位の人物が  
必ずしも一般的に知られているとは言  
えない。

また、張良や陳平の功第は高くない  
が（それぞれ六十二位と四十七位）、前者は  
蕭何に次ぐ規模の<sup>ほうゆう</sup>封邑（<sup>ばんこ</sup>萬戸）を得、後

者は丞相に上じょうしょうっているなど、評価の難しい部分もある。とはいえ、恵帝期以降の改変に留意しつつも、短文とはいえ独自記述をかなり持つ功侯（列侯事由）も注目しなければならない。定型表現が多いものの、列伝等に名の見えない人物が登場し、定型表現のなかにも独自情報を含むものが多数いるゆえである。

さらに、先述の通り、夏侯嬰のような人物についても、改めて『史記』内の記述を洗い直す必要があるだろうし、功第下位かつ知られていない人物が重要ではないとは必ずしも言えないことはここまで述べてきたことから明らかである。

そこでこの連載では、功臣表の功侯やその他『史記』中に散在する記述、

あるいは考古史料をも活用して、やや読み物風に漢建国の功臣たちの姿を追ってみたいと思う。結果として見えてくるものがどのようなものかは、筆者にもまだわからない。

前置きが長くなってしまったが、次回より具体的な検討に入りたい。最初に検討するのは、功第七位に挙げられるものの、事績もほとんど残らず、したがって一般的な知名度も極めて低い  
けいけん  
奚涓である。





# 岡本隆司『近代日本の中国観 石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』



(講談社、2018年7月、  
四六判、232頁 1,550円+税)

池田修太郎

岡本隆司『近代日本の中国観 石橋  
たんざん 湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』は、  
「日本人がどのように中国を理解してきたか」という問題について、日中の相互理解の困難さと必要性を訴え続けてきた著者が、「日本人の中国観のありようを考えてみたい、という年来の素志」に基づき、講談社のPR誌『本』における連載をまとめたものである。まずはその構成を下に示そう。

はじめに

第一章 石橋湛山：小日本主義と中国社会

第二章 矢野仁一：王道政治と中国社会

第三章 内藤湖南：「近世」論と中国社会

第四章 橘樸：「ギルド」と中国社会

第五章 時代区分論争

むすび：日本人のまなざし

文献案内

あとがき

関連年表

人名索引

本書は「中国をみつめつづけた先人のまなざしをふりかえりながら」、「いま現在の中国理解をいっそう深める」ために、各章につきひとりの言説を取り上げて議論を展開していく形式を取っている。その中心となるのは、取り上げられた各人の中国社会に対するまなざしである。第一章から第四章までの副題に「中国社会」が含まれているように、著者は各章で取り上げる人物、あるいはその周辺が中国社会に対してどのような見解を有していたかを徹底的に掘り下げ、そこから日本人の中国への「まなざし」を浮かび上から

せようとするのである。第五章についても、「時代区分論争」という論争自体が、中国社会をどのように評価するかという問題と密接に関わっていたことを示しながら論が進められており、論述のスタンスは一貫している。

こうした前提の上で著者がまず取り上げるのは石橋湛山である。著者は石橋の言説が現代において極めて高い評価を受けているとしたうえで、その言説が「明快で説得力に富んでい」ながらも、「中国に対する内在的な考察を欠き、論理矛盾を抱えたために説得力を持たなかった」と喝破する。そのうえで、「当時の輿論を指導、代表」していたのが、「支那通」と呼ばれる「中国問題にくわしい専門家」たちであったことを指摘する。

そうした「支那通」の代表として登場するのが東洋史家・矢野仁一である。莫大な著作をものし、中国を「動く支那」と「動かざる支那」の二層、すなわち「士」と「庶」に乖離した社会と表現した矢野の言説について、著者は中国の「愛国心」、あるいは中国社会のありように対するまなざしから、矢野の言説が「石橋の言説と好対照をなす」と評した。

矢野に続くのは東洋史の巨人・内藤湖南である。著者は、当時の日本における西洋史学の受容と東洋史学の草創、そして湖南自身の文化と社会の変化へのまなざしが「唐宋変革論」を生み出す重要な要素であったことを述べ、東洋史学上の学説である「唐宋変革論」を同時代上に位置づけなおす。

そして、矢野・内藤という二大巨頭

に続くのが橘<sup>たちばなしらき</sup>樸である。橘は「智識の内容の非科学的な」「支那通」を嫌悪し、「科学的方法」を用いて中国に相對することを提唱した。著者はそうした橘の態度が結局、橘が批判した「支那通」と「思考方法・精神構造でほとんどかわるところはない」といい、こうした「中国の政治・社会を無前提、無媒介に日本や西洋と同一視したうえで對比する認識法」が、「日本人の中国觀に定着し、」「抜きがたい習癖のようになって」おり、それは「日本における西洋式アカデミズムの確立と普及」とも「揆を一にする」と指摘する。その事例として取り上げられるのが、中国における「ギルド」の問題であり、あるいは「共同体」論争であった。

そして、戦後の価値觀の大轉換の中

で、マルクス史学に基づき中国「停滞論」の打破を目指す「歴研派」が登場する。この「歴研派」と「京都学派」との間で行われたのが第五章の主題となる「時代区分論争」であった。著者は、「時代区分論争」の前提となる階級闘争史観・マルクス史学が内包していた「近代主義」とそれに向き合う日本人全体の姿勢」に対する問題提起を、それに「挑戦」した谷川道雄を通じて行うのである。

こうした記述を通じ、最後に著者が提示するのは、「日本人のまなざし」に対する痛烈な批判と警鐘である。「外来の思想ならすべて尊重すべきだと信じ、難解な概念ならすべて高尚だとみるナイーヴな感覚」によって、「理論・概念をよくのみこまないまま、現実の

対象にあてはめ」、あるいは「事象をじっくりと見ないまま、概念を貼り付けて理論化してしまう」のが、戦前と戦後に連続する日本人の「中国社会へのまなざし」である。そして、現代に至っても「なおお題目とレッテル貼りで騒いでいる現状」を「遺憾」と述べ、中国の実態を直視することの重要性を重ねて強調する著者の総括は極めて重い。本書は、我々日本人の中にある無意識的な「まなざし」がどのような結果を生んできたかをあらためて突きつける、極めて鋭い批判の書といえるだろう。研究者のみならず、中国に関わり、あるいは興味を持つすべての人に一読を勧めたい。





# 中国時代劇の世界

佐藤信弥

## 第1回 『昭王～大秦帝国の夜明け～』



百度百科「大秦帝国之崛起」より

2017 年放映・配信。原題は『大秦帝国くつき之崛起』。孫皓暉スンハオフイによる歴史小説『大秦帝国』6 部作のドラマ版第 3 部となる。本シリーズは商鞅しょうおうの変法から秦による統一、秦帝国の崩壊までを描く。本作では始皇帝の曾祖父昭襄王しょうじょうおうの時代を描く。第 1 部『大秦帝国』（原題『大秦帝国之裂变』）は原作者孫皓暉が脚本を担当したことで話題となったが、本作では第 2 部『大秦帝国 縦横＝強国への道＝』（原題『大秦帝国之縦横』）に引き続いて丁黒監督、張建偉テインヘイ脚本のコンビで制作された。話数はテレビ放映版全 34 話、ネット配信版全 40 話、日本語版全 38 話とばらつきがある。

本シリーズでは第 1 部では秦の孝公こうこうと商鞅、第 2 部では秦の恵文王けいぶんおうと張儀ちょうぎという具合に秦の君主とブレインが主

役となって二人三脚で秦国の政治・軍事を担い、それにヒロインが花を添えるという構図になっているが、本作では張博<sup>チャンポー</sup>演じる秦の昭襄王（作中では嬴稷<sup>えいしよく</sup>の名で呼ばれる）に対して、そのブレーンとなる存在が見当たらない。その役にあたるべき范雎<sup>はんしよ</sup>（張祿<sup>ちやうろく</sup>）は、知謀はあるが人格低劣な小人物として描かれ、魏冉<sup>ぎぜん</sup>は権勢を誇り、甥の昭襄王から煙たがられる存在である。強いて言えば白起<sup>はくき</sup>がその役回りということになるだろうか。本作はヒロインにあたる存在も影が薄く、やはり強いて言えば寧靜<sup>ニンチン</sup>演じる昭襄王の母、宣太后<sup>せんたいごう</sup>が第2部から引き続いてその役回りを担っているということになるだろうか。

第1部は正統派の大河ドラマという雰囲気だったが、第2部以降はシニカ

ルさや露悪性がめだつ作風となっている。それでも第2部はエキセントリックな演技が印象的な富大龍<sup>フーターロン</sup>演じる恵文王と、コメディ俳優の喻恩泰<sup>ユイエンタイ</sup>演じる張儀のコミカルなコンビが「毒」を中和していたが、本作ではそのような中和剤すらなく、露悪性がストレートに視聴者に直撃する。

登場人物も基本的に利己的な人物として描かれる。たとえば孟嘗君<sup>もうしょうくん</sup>。昭襄王は母方の叔父の魏冉を牽制するために、国際的に威信を持つ齊<sup>せい</sup>の孟嘗君を丞相として迎え入れる。しかしその孟嘗君も一皮剥けば、昭襄王に差し出された文書に自分の誹謗中傷が書かれているのではないかと気になってたまらず、夜な夜な食客に盗ませるような俗物であった。この竹簡の一件は実

は孟嘗君の本性を暴き出して息子に見せつけようとする宣太后の仕掛けの罠だったというオチとなる。この一件で秦に居づらくなった孟嘗君は、有名な「<sup>けいめいくとう</sup>鶏鳴狗盗」の話を<sup>はさ</sup>挟んで齊へととんぼ返りしてあっという間に重臣へと返り咲き、諸国と結んで秦へと攻め込み、自分を登用した昭襄王の面子を<sup>つぶ</sup>潰すのも<sup>いと</sup>厭わない。孟嘗君だけでなく戦国四君全員がこんな調子で描かれている。

歴史的事件についても独特の解釈が加えられている。秦と<sup>ちょう</sup>趙との<sup>ちょうへい</sup>長平の戦いでは、両軍とも兵糧不足に悩まされて攻め手を欠いていたのが、秦側が蜀道の整備に成功し、蜀からの兵糧運搬が可能となったことで優位に立つ。趙の総大将<sup>れんぱ</sup>廉頗はそうした状況をわきまえず、これまで通り守戦に徹すれば秦

に勝てないまでも負けることはないと主張する。しかし趙の孝成王や平原君ら重臣はもはや兵糧不足のまま戦いを継続することに耐えきれず、廉頗に換えて、積極攻勢を主張して一発逆転の可能性を感じさせる趙括ちょうかつを総大将とする。まだ若く経験不足で頭でっかちの趙括を総大将としたことが趙の敗因ではなく、秦が兵糧不足を解消した時点で、趙の総大将が廉頗だろうが趙括だろうが勝負は着いていたという話となっているわけである。

そして秦側は白起（本作の主要登場人物で唯一高潔な人物として描かれている）が総大将となって趙を打ち破り、趙軍の捕虜20万を生き埋めにする話が展開される。これについても独特の創作が加えられている。白起は自軍に20万人もの

捕虜を養う兵糧がなく、かといって彼らを釈放してみすみす趙に20万の大軍を返すこともできず、皆殺しにしてしまうほかないと思い悩む。趙国出身の白起の妻は単身昭襄王のもとに駆け込んで直談判に及ぶ。昭襄王は彼女に対し、捕虜の対応については白起の好きにしてよいということで、この件に関して全く利害関係のない第三者を使者に選び、白紙の詔書をその者に託すと約束する。それならいかなる意図も介在させずに中立な状態で白起が判断できるはず、これで20万の捕虜の命は助かったと白起の妻は胸をなで下ろす。ところが白紙の詔書を受け取った白起は、捕虜を養うための食糧が送られてこないということで昭襄王の意を察し、捕虜の生き埋めを実行に移す。一見何



の意図も介在していないようでも、食糧を送らないという措置が強力なメッセージとなっていたというわけである。

この長平の戦いに前後して、秦側が趙の有力者の買収工作を進める場面が出てくるのだが、中国での放映・配信開始当時、その買収工作の対象者リストの竹簡に篆書で習近平・胡錦濤・シーチンピン フーチンタオ温家宝・李克強らの名前が書かれている場面が映っていたことで騒動となった（この場面はネット配信版では既に削除されている）。政府のトップとなる政治家はみんな賄賂に弱い「趙家の者」（魯迅のろじん「阿Q正伝」に由来する、特権を持った有力者を示す隠語）というわけである。この事件は、本作全体に漂うシニカルで露悪的な雰囲気によくマッチした格好の演出であるようにも思える。長平の戦い後、

昭襄王は大功を建てた白起に猜疑心<sup>さいぎしん</sup>を抱くようになり、白起も主君に不信感を抱き、彼なりの開き直りと取れるような態度で対峙していくことになるが、その後の展開については是非自分の目で確かめて欲しい。

現在中国では始皇帝による統一を描く第4部『大秦帝国之天下』の制作が進められ、トレーラーも公開されている。こちらにも大いに期待したい。



## 研究会案内

2019 年 5 月 25 日 (土) 14:00 ~ 17:00

第 72 回 漢字学研究会

会場：キャンパスプラザ京都 6F 第 1 講習室

題目：松宮貴之「殷周期に於ける墨刑に就いての一考察：文字資料と民俗学を中心として」

2019 年 5 月 25 日 (土) 13:00 ~

第 68 回 東北中国学会大会 (第一日)

会場：秋田大学教育文化学部

2019 年 5 月 26 日 (日) 9:00 ~ 12:00

第 68 回 東北中国学会大会 (第二日)

会場：秋田温泉さとみ

詳細：<https://sites.google.com/site/dongbeizhongguoxuehui/next>

2019 年 5 月 25 日 (土) 10:00 ~ 17:20

満族史研究会 第 34 回大会

会場：関西大学千里山キャンパス

以文館 4F セミナースペース

ハスゴワ「聖母聖心会の宣教師たちが「購入」したダラト旗の土地におけるトラブル」

中井勇人「マンジュ国家における葬送と支配」

中村朋美「18 世紀前半のロシア帝国と広東貿易」

中村和之「間宮林蔵『北夷分界余話』にみえる「ジャンケイ」について」

内田慶市「満漢文献資料の国内外での所蔵状況について」

児倉徳和「『シベ語のモダリティの研究』について」

河内良弘「『満洲語辞典 増補改訂版』について」

松浦章「清対準噶爾戦における晋商范毓麟の軍需輸送」

2019年9月27日（金）

2019年9月28日（土）

世界漢字学会 第七届年会

会場：立命館大学

本欄に案内の掲載をご希望の方は、

hoc@shigakusha.jp か Twitter: @hoc2019

までご連絡ください。

かめだ としたか

亀田 俊和

(日本中世史)

国立台湾大学助理教授

- ・『観応の擾乱：室町幕府を二つに裂いた足利尊氏・直義兄弟の戦い』
- ・『征夷大將軍・護良親王』

さとう しんや

佐藤 信弥

(中国古代史)

立命館大学白川静記念東洋文字  
文化研究所 客員研究員

- ・『周：理想化された古代王朝』
- ・『中国古代史研究の最前線』

わたぬき てつろう

## 綿貫 哲郎

(清朝史・八旗制度・満洲語檔案資料)

日本大学兼任講師

- ・「再論祖大寿与 " 祖家将 "」
- ・「正白旗漢軍一等延恩侯朱氏の封爵」

ひらばやし も え ぎ

## 平 林 緑萌

(中国古代史)

編集者

- ・「墨子説話諸篇考」
- ・「墨子救宋説話考」

いけだしゅうたろう

# 池田修太郎

(清朝史)

立命館大学大学院文学研究科博士  
課程後期課程

・「康熙年間の年羹堯——行政改革  
の面を中心に」

---

## 編集後記

---

中国史史料研究会会報、始動しました。準備号はお楽しみいただけましたでしょうか。スマートフォンの画面でも読める誌面を目指しましたが、試行錯誤の連続で、ややお見苦しい点もあったやもしれません。ただ、内容と執筆陣の方は、編集子が予想していた以上に多様で充実したものになりました。寄稿して下さった先生方には、あらためて御礼申し上げます。そして、ここまでお読み下さった皆さまには、今後とも本会報をよろしくお願い申し上げます。

(編集：秋山陽一郎)



2019 年度  
中国史史料研究会役員構成

佐藤信弥（会長）

広中一成（副会長）

綿貫哲郎（副会長）

秋山陽一郎（幹事）

平林緑萌（顧問）

山田崇仁（顧問）

# 中国史史料研究会会報 準備号

2019 年 5 月 7 日発行

---

編集

中国史史料研究会

hoc@shigakusha.jp

<https://shigakusha.jp/society/hoc/>

発行・事務局

合同会社 志学社

〒 272-0032

千葉県市川市大洲 4-9-2

Tel 047-321-4577 / Fax 047-321-4578

info@shigakusha.jp

<https://shigakusha.jp>

---

本書の著作権者に無断での複製（コピー・デジタル化など）並びに無断で複製したものの譲渡及び配信する行為については、著作権法上での例外を除いて禁じられています。また、第三者（代行業者など）に依頼して本書を複製する行為は、個人や家庭内での利用を問わず一切認めておりません。